群教セ	G02-04
	平 28.261 集
	地理歴史

歴史的事象の背景や影響について、多面的・多角的な考察を促す授業の工夫

――ICT を活用した情報の取り出しと発表活動を通して――

特別研修員　岡田　明久

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

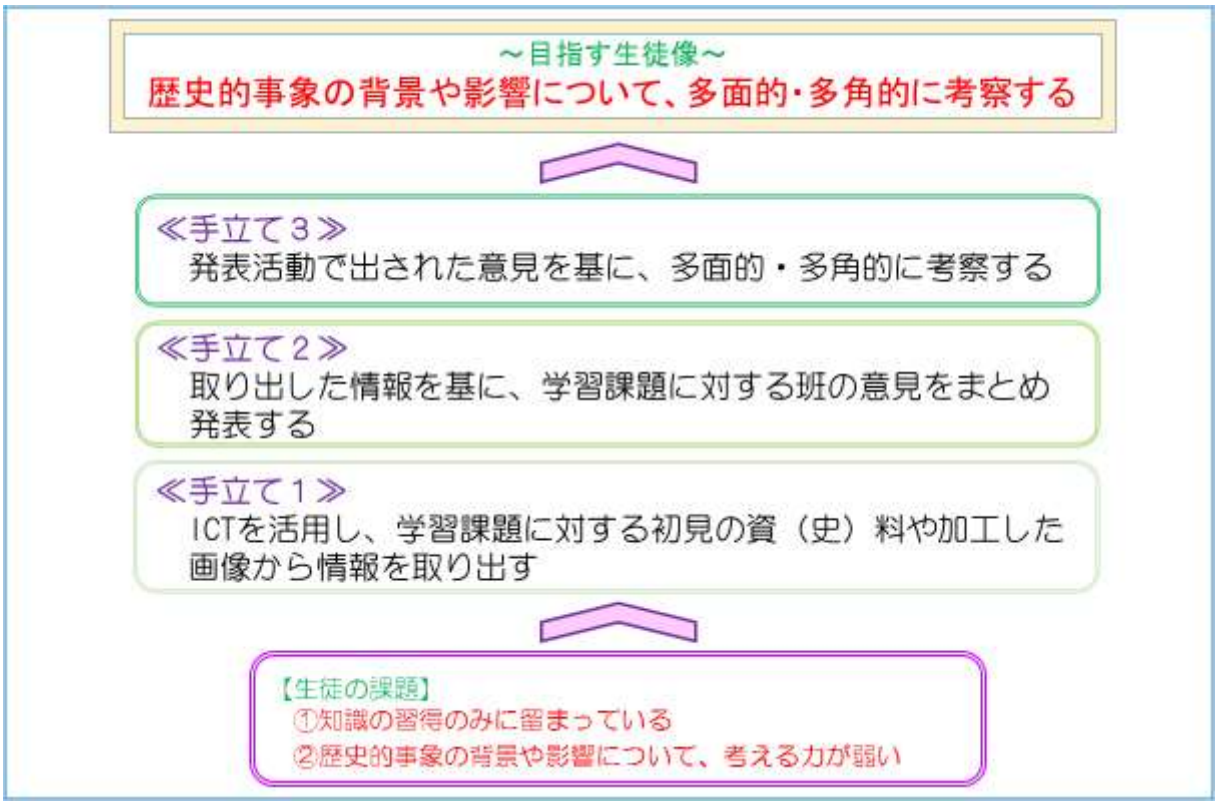
群馬県「県立学校教育指導の重点」Ⅳ高等学校等における教科等の指導の充実に、「基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるとともに、これらを活用して議題を解決するための思考力・判断力・表現力等を育成するようにする」とある。そして、地理歴史の目標では、教科指導力の向上として「ICT 機器を効果的に活用しながら、問題解決型学習やグループワーク等、生徒による主体的・協働的な学習活動を取り入れた授業を実践する」とある。

生徒の中には、センター試験や大学入試の結果に意識が向くことが多く、授業では教科書の内容理解及び学習進度が最優先となっている。そのため、授業は教師から生徒への一方的な説明形式になりがちで、生徒の多くは知識の習得のみに留まっていることが課題である。これを改善するために、研究テーマを「歴史的事象の背景や影響について、多面的・多角的な考察を促す授業の工夫」とし、サブテーマとして「ICT を活用した情報の取り出しと発表活動を通して」とした。

ICT を活用することで、生徒に学習の深化につながる初見の資（史）料や加工した画像などをより視認性の高いものとして提示し、様々な情報の取り出しを行う。そして、取り出した情報を基に、発表活動を通じて多面的・多角的に考察ができると考え、上記の研究テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

1　研究構想



２　授業改善に向けた手立て

歴史的事象の背景や影響について、多面的・多角的な考察を促すための授業の工夫として、次の三つの手立てで構成する。

手立て１ 　ICT を活用し、学習課題に対する初見の資（史）料や加工した画像から情報を取り出す 手立て２ 　取り出した情報を基に、学習課題に対する班の意見をまとめ発表する 手立て３ 　発表活動で出された意見を基に、多面的・多角的に考察する

手立て１は、ICT を活用してなるべく生徒に初見の資（史）料や加工した画像を映しだし、学習課題にしたがって、様々な情報を取り出す手立てである。学習内容に関連したものを見て、気付いた点や疑問に思った点などを挙げることで、手立て３の多面的・多角的に考察をするための材料となる。また、教科書や資料集などに掲載されていないものを提示することで、生徒がより興味・関心を持って資料などに向き合い、様々な情報が取り出すことができることを期待するものである。

手立て２は、手立て１で取り出した情報を基に、学習課題に対する班の意見をまとめ発表する手立てである。班員の意見を聞き、共有することで、新しい発見や疑問に思った点を解決に導くことが可能である。また、手立て３に向けて意見をまとめ発表することで、取り出した情報がより鮮明なものになる。

手立て３は、手立て２で発表された意見を基に、歴史的事象について多面的・多角的に考察する手立てである。発表活動で出された他者の意見と自分の意見を比較しながら、正しい答えを導き出すことで、より深い学びになることもねらいとする。

このように三つの手立てを講じることで、歴史的事象を多面的・多角的に考察することができる。さらに、様々な情報の取り出しと発表活動を通じて、知識の習得にとどまらず、歴史の本質に迫れることを期待したい。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　手立て１で提示した資料・画像が初見のものであったこともあり、生徒たちは比較的興味・関心を持ちながら情報の取り出しができていた。それにより、手立て２でも意見をまとめることができた。

○　手立て２で取り出した情報を班でまとめ発表したことで、手立て３の多面的・多角的な考察につなげられた。また、学習課題で求められている事柄などについても、多くの班で答えられていた。

○　資料・画像の難易度を下げず情報の取り出しができたために、様々な意見が出た。それを参考にして多面的・多角的な考察につなげられた。

２　課題

○　手立て２の情報を班内でまとめ発表するでは、資（史）料や画像からの情報の取り出しができず、意見のまとめや発表が不十分な班があった。また、班活動において生徒が積極的に活動する反面、一部に消極的な生徒も見られたため、班全員での深い学びまではできなかった。

○　生徒の実態にあった、資（史）料・画像の選択及び発問の内容を、生徒の様子を踏まえて慎重に選ぶ必要がある。そして、情報を取り出す時も、視認性を考慮して映し出すことが重要である。

実践例

１ 単元名　「武士の社会」（第２学年・２学期）

２ 本単元について

本題材は、源頼朝の死後に台頭した北条氏が、執権政治を確立・強化するまでの経過を学習する。まず、朝廷と幕府との二元的支配の状況であったが、承久の乱で幕府が勝利したことで大きく変わった。それは、京都に六波羅探題・西国に新補地頭が新たに設置されたことで、幕府権力が優位になったことを意味する。そして、３代執権の北条泰時による御成敗式目の制定・評定衆の設置、５代執権の北条時頼による引付衆の設置で、執権政治が強化されていった。しかし、北条氏独裁の性格も強まることにつながり、幕府と御家人との主従関係の崩壊ならびに幕府の滅亡につながることを生徒に気付かせたい。

次に、当時の武士の生活・土地支配・分割相続などについても触れる。そして、地頭が荘園領主との対立の中で、下地中分などにより荘園侵略を拡大していく過程を、当時描かれた荘園絵図などから読み取らせたい。さらに、地頭の荘園侵略が幕府権力の拡大につながったことにも気付かせたい。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	北条氏による執権政治の確立・強化の中で、下地中分などの地頭の荘園侵略が進み、同時に幕府権力も拡大していったことについて理解する。	
評価規準	関心・意欲・態度	北条氏の執権政治の確立までの流れと、最初の武家法として制定された御成敗式目の特徴について理解している。
	思考・判断・表現	承久の乱の勝利により、畿内・西国に新補地頭が設置されたことで朝廷と幕府との二元的支配から、幕府が優位になったことを考察し、説明することができる。
	資料活用・技能	弓削島荘絵図と東郷荘荘園絵図から下地中分の実態や特徴を読み取り、日置北郷絵図に領家分と地頭分との境界線を引くことができる。
	知識・理解	北条氏の台頭から有力御家人の滅亡、執権政治の確立までの経過を理解している。
過程	時間	主な学習活動
課題把握	第１時	・北条氏が有力御家人を滅亡させ、執権の地位に就くまでの経過および、承久の乱について理解する。
課題追究	第２時	・３代執権・北条泰時のもとで連署・評定衆、５代執権・時頼のもとで引付衆や皇族将軍を迎えるなど、執権政治が強化されていったことについて理解する。
	第３時	・武士の館や分割相続、惣領制といった生活の様子について考察し、意見を発表する。
まとめ	第４時	・荘園絵図から下地中分の特徴を確認し、地頭の荘園侵略及び幕府権力の拡大について考察する。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全４時間計画の第４時に当たる。北条氏による執権政治の確立から強化までの流れ、朝廷と幕府の二元的支配から幕府優位に変化した過程を学習した。そして、本時では地頭の荘園侵略の様子を荘園絵図から読み取るとともに、幕府権力の拡大について考察することで、単元のまとめとしたい。 そこで、次の三つの手立てを次のように具体化した。

手立て１　ICT を活用し、学習課題に対する初見の資（史）料や加工した画像から情報を取り出す

鎌倉時代（12～14 世紀）に荘園絵図が描かれた理由と、紀伊国桛田荘絵図（1183 年作成）と薩摩国日置北郷絵図（1324 年作成）をそれぞれ比較し、特徴や違いを三つ挙げる。

手立て２　取り出した情報をもとに、学習課題に対する班の意見をまとめ発表する

手立て１で取り出した情報を班でまとめ、なぜ２枚の荘園絵図の違いが生じたか、その理由を考察し発表する。また、ICT で２枚の荘園絵図についても説明する。

手立て３　発表活動で出された意見を基に、多面的・多角的に考察する

手立て２で発表された意見をもとにして、多面的・多角的な考察を行う。また、下地中分の特徴の説明と薩摩国日置北郷絵図に下地中分を示す朱線を生徒が引き、それを ICT で確認する。

４　授業の実際

本時では、下地中分などの地頭の荘園侵略について、当時描かれた荘園絵図から生徒が情報の取り出しをする。そして、学習課題に対しての意見をまとめ発表し、発表活動で出された意見を基に多面的・多角的に考察することをねらいとした。

(1)　手立て１　「ICT を活用し、学習課題に対する初見の資（史）料や加工した画像から情報を取り出す」

２枚の荘園絵図（図１）をスクリーンに映し、カラーコピーをしたものを各班に配布した。そして、≪学習課題≫として鎌倉時代に荘園絵図が多く描かれた理由と、２枚の絵図を比較して特徴や違いを三つ挙げる。

【多く描かれた理由（生徒の意見）】

・一人一人の荘園の領域を示す（奪われるのを防ぐ・納税をさせるため）。
・土地管理をしっかりするため。
・不輸不入権を公認し、領域を絵図で明示するため。

【２枚の特徴や違い（生徒の意見）】

・(1)より(2)の方が、詳細に描かれている。
・(2)には、名前がある。
・(2)の方が、土地区分がされている。

図１のように、荘園絵図を ICT でスクリーンに映し出した場合に、以下の利点が挙げられる。

① 初見の資料を提示することができ、生徒の興味・関心の向上へつなげられた。
② 学習課題の説明を容易にし、生徒の積極的な活動に結びつけられた。

また、荘園絵図の見えにくい箇所などを拡大できることや、多数の資（史）料や画像の提示・加工がが容易にできることも、利点として挙げられる。

(1)紀伊国桛田荘絵図（1183 年作成）

(2)薩摩国日置北郷絵図（1324 年作成）

※(2)は生徒が初見の資料

図１　手立て１で使用した資料

(2)　手立て２　「取り出した情報を基に、学習課題に対する班の意見をまとめ発表する」

手立て１で取り出した情報を班でまとめ、なぜ２枚の荘園絵図に違いが生じたか、その理由を考察し発表する（図２）。そして、ICT で２枚の荘園絵図について説明した（図３）。

【２枚の荘園絵図の違い（生徒の意見）】

・境界で、もめごとが発生したから。
・税を免れようとするものが存在した。
・力関係が地頭＞荘園領主となり、奪われないようにするために、土地区分を明示。
・地頭と荘園領主が、土地管理を出来るようにするため。

図２　手立て２の様子①

(1)には、『牓示』の黒点がある。

(2)には、『領家方・地頭方』の文字が見られる。

図３　手立て２の様子②

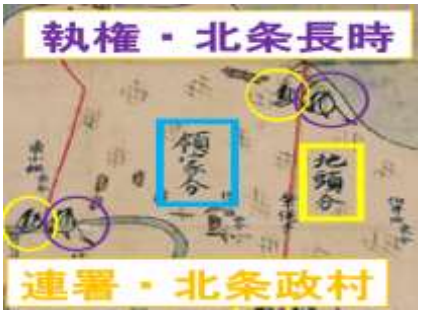
ICT の利点として、生徒が気付けなかった『牓示』や『領家方・地頭方』の文字を、丸印で強調や文字部分を切り取り・拡大したことで、確認することができた。

(3)　手立て３　「発表活動で出された意見を基に、多面的・多角的に考察する」

手立て２で発表された意見を基に、荘園絵図の変遷の背景や影響について、多面的・多角的に考察した。まず、ICT で伯耆国東郷荘の下地中分図における花押の説明などを行い、図１（2）の薩摩国日置北郷絵図に下地中分を示す朱線を生徒に引き、それを ICT で確認した（図４）。

ICT の利点として、下地中分の特徴を効果的に短時間で説明し、生徒の知識の定着につなげられた。そして、不鮮明な部分の朱線の確認も容易であった。

花押の説明



下地中分の朱線の確認

図４　手立て３の様子

５　考察

手立て１の「ICT を活用し、学習課題に対する初見の資料や加工した画像から情報を取り出す」では、荘園絵図が鎌倉時代に多く描かれた理由について、多くの生徒が正しい解答を導き出していた。それに対して、２枚の荘園絵図を比較して、特徴や違いを三つまで挙げられた生徒はいなかった。『牓示』や『領家方・地頭方』の文字に気付けなかった者や、どのような視点で比較してよいのか分からない生徒もいた。そのため、図３のように ICT で拡大した絵図を生徒に提示し、確認したことは効果的であったと考える。また、授業を構想するに当たり、教師が比較的分かりやすい質問だと思っても生徒にとっては分かりにくい場合があるとともに、発問の難易度も生徒の実態にあったものを選択することが必要である。

手立て２の「取り出した情報を基に、学習課題に対する班の意見をまとめ発表する」では、手立て１で取り出した情報を班でまとめた。決められた時間内での活動であったため、意見をまとめきれない班や一部の生徒に頼りがちとなる班もあり、班全体による学びがやや不十分であった。そのため、班のまとめ役や意見の発表者を交替で行えるようにするなど、他人に任せきりにならないような工夫も必要であった。

手立て３の「発表活動で出された意見を基に、多面的・多角的に考察する」では、伯耆国東郷荘の荘園絵図から、地頭の荘園侵略が幕府権力の拡大を示すことに気付くことができた。また、さまざまな情報の取り出しを通じて、絵図などの資（史）料の重要性にも気付くことができた。ICT を活用することで、多数の資料提示が容易となり、生徒の多面的・多角的な考察に有効的であると感じた。